

環境の時代は農の時代（下）——有限の世界での農の意義——

●「基本原理」は人々の戦いの蓄積

循環型社会をつくるための基本原理を紹介しているが、これは重要な話題である。

経済社会では「利益」が基本原理であり、目的であった。農業もまた、経済社会の基本原則である利益に従わざるをえない。利益がなければ、経済活動を継続することは困難だからだ。

しかし、利益が目的だからといって、他人から奪ったり（泥棒や略奪）、自由な市場競争を排除して（談合や独占など）利益をあげるとは、経済学、経済社会では禁止している。利益を得るには奪うのがいちばん簡単だ。それゆえ、放っておけば利益を求めて奪い合いになりかねない社会を、「奪ってはいけない」というルールで規制するようになった。

なぜなら、奪うこと、泥棒や談合や独占は「社会全体の豊かさ」にはつながらないからだ。奪うことは一時的には一部の人の利益になっても、社会全体が貧しくなる。泥棒の横行する社会は豊かではない。高い小作料を払って小作人が耕す社会は豊かではない。労働者が安い賃金で不安定な身分で働き続ける社会もまた豊かではな

い。

それゆえ、小作人や労働者は厳しい弾圧を受けながらも告発を繰り返し、小作制度の撤廃や労働者の保護を制度として定着させてきた。

こうした人々の戦いの歴史の上に、経済社会のルール、基本原理として「奪う」ことが禁じられるようになった。他人から奪うだけでなく、働く者から奪うこともルールで禁止された。農民運動や労働運動は、そういった意義があった。

●知的センスと制度

白人だから黒人を奴隷として扱ってもよい。黒人は給料が安くてもよい。黒人は人間として劣っている。……などと現在の社会で発言すれば、その人の人格、知的センスが疑われ、犯罪者とまでされる社会・時代である。

奴隷制度は人が人から奪う、最もひどい仕組みであった。そして、その仕組みを正当化するために白人たちは、黒人は生まれながらに劣っている、といった根拠のない情報をつくりだし、奴隷制度を擁護するような人々のセンスを育てていた。

「人間は生まれながらにして自由かつ平等な権利をもっている」

これは一七八九年のフランスの人権宣言の一部で、封建制度、王が農民や国民から奪う仕組みを廃止したときのものだ。封建制度では、王は神の代理人という情報を民に教えこみ、民が王を敬うようなセンスを育て、王が民から奪う制度を維持していた。

さて、フランスの人権宣言。人権とは名ばかりの「男の権利宣言」ではない。当時、女性に人権を与えるというセンスはなかった。

現代社会の課題の一つは女性から奪うことの廃止である。女性というだけで給料は安く、不当な扱いを受けている。女は数学に弱い、機械に弱い、という嘘の情報（うそ）が流され、女は結婚したほうが幸せ（結婚して安いパートの給料で働くことが幸せ）というセンスが根づかされてきた。

しかし、これもまた女性運動が発言力を強め、新たな社会のルールをつくりつつある。いまや「セクシャルハラメント」という概念が確立し、女性を性の道具として扱うようなセンスが否定されつつある。また、「男女雇用機会均等法」という不十分なルールではあるが、「男女平等法」への過渡期の法律として「女性から奪うことが許されないセンスとルールが徐々につくられつつある」。

問題は環境である。
楽をして、いい生活をしようと思ったら、どこからか奪うしかない。奴隷からも奪えず、第三世界からも奪えず、女性からも奪えずに、（必要以上に）豊かな暮らし

をするには、未来から奪うしかない。

自家用車で好きなどころに移動し、モノにあふれた暮らしを実現するために、数億年かけて蓄積した地球の遺産である石油をわずか一〇〇年ほどで消費し（残りは四〇年分ほど）、そのゴミである炭酸ガスで汚染を拡大している。

いまのわたしたちの利益のために、遺産もなくなり、汚染された環境を受けとるのは、現代の子どもたちであり、これから生まれてくる子どもたちである。

これが環境問題である。

小作人や奴隷や女性と違って、未来の大人である彼らが言葉が発することは、ない。

それゆえ、未来に生きる彼らの痛みや不利益を慎重に考慮し、彼らに代わって発言するためのセンスがわたしたちに必要になる。見えない未来を論じるための知的センスである。

● 知的センスと経済学者

「フラスコの中にバクテリアとエサを入れました。時間とともにバクテリアの数はどうなるでしょう。図に描いてください」（次ページ図参照）

大学の講義では、図1のように、どんどん増えるという学生の解答例は二割もある。「どこまで増えるの?」と聞くと、慌てて消しはじめる。フラスコの大きさが有限であるということを考えていなかったのだ。

図2のように、フラスコの大きさまで増えて、あとは

そのままという答えも多い。

正解は図3。資源としてのエサが枯渇するだけでなく、エサを食べた後に出す廃棄物などで環境が汚染され、資源の枯渇と汚染によってバクテリアは絶滅する。

しかし、フラスコの中に、バクテリアだけでなく、ワムシ、らんそう、クロレラ、原生動物などを入れて多様な生物世界をつくると、バクテリアだけ独占的には増えることはできないが、図4のように、すべての生き物と一緒に持続的に生存することが可能になる。

残念なことに、図5のaの部分を見て、「成長」と評価し、さらなる成長を求めているのが、経済学者である。

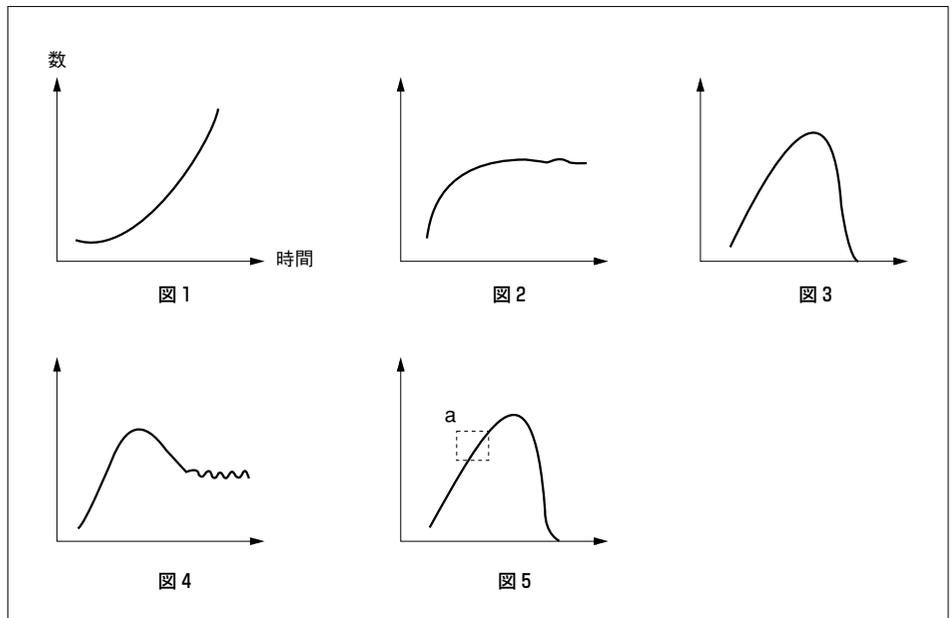
aは破壊への道という認識が経済学者にはない。

未来を見通す知的センスに欠けているのが経済学者である。

持続的社會という言葉があるが、経済学では、その定義はない。定義がないまま、持続的社會という言葉を使っ
て言い出している。さらに、経済学者は持続的成長とま
とであり、有限の地上での無限の成長はありえない。む
やみに成長した経済は、地球の有限な自然に制約されて
停滞し、破綻へと向かう。

農業（近代の農業を除く）は、耕して収穫し、肥料を
入れて農地を元の状態に戻して、また耕し収穫していた。
それゆえ、農業の生産と消費は持続的であった。

一方、工業は資源を掘り出して商品を作り、そのゴミ
は放置するだけ。それゆえ、工業の見た目の生産性は高
かった。



未来を見通すセンスのない経済学者は、見た目の生産
性の高さで工業を高く評価し、農業を否定してきた。

しかし、環境の時代を迎え、持続的社會が求められる
いま、未来のための新しいセンスが作りだされ、農の
生産、農の労働が再び輝きを取り戻そうとしている。

参考文献：
 『有限の生態学』（栗原康著、岩波書店、1994年）
 『なぜ経済学は自然を無限とらえたか』（中村修著、日本経済評論社、1995年）
 『経済学における無限の自然』（中村修著、『沿岸域』第16巻第1号・27～30ページ、2003年）

感想や意見は、下記まで。

osamu.nakamura@nifty.ne.jp
<http://homepage3.nifty.com/osamu-nakamura/index.htm>